児童雑誌『こども』に見る マレー・イスラム児童文学の試み

山本 博之

本稿では、シンガポールで刊行されたマレー語月刊誌『カラム』(1950〜1969年) の創刊者であるエドルスが1953年に刊行した児童雑誌『こども』(*Kanak-Kanak*) をもとに、児童向け読み物の出版という観点から見たエドルス像を検討する。

本稿は別稿［山本 2021］で検討したマレー文学史におけるエドルスの位置づけの再評価の続きにあたる。エドルスの経歴や『カラム』の位置づけ、およびマレー文学研究におけるエドルスの評価については［山本 2021］を参照いただきたい。その趣旨は次のようになる。

マレー文学研究では、エドルスの小説は性的に煽情的なもので文学的な価値は低いと評価されてきた。ただし、エドルスは政治指導者や宗教指導者に対して臆さず批判を繰り返したため、マレー人政党からは不買運動を呼びかけられ、イスラム法学者からはエドルスの本を「買うこと、読むこと、用いること、書くこと」を禁じる宣告を出されており、このことと合わせて考えると、エドルスは性的に煽情的な小説ばかり書いていたという評価には、政治指導者や宗教指導者を批判し続けたエドルスの評価を低めようとするマレー人主流派の意識が反映されていた可能性があるようにも思われる。

［山本 2021］ではエドルスが1948年から1951年にかけて執筆・刊行した25の小説について検討した。本稿では、エドルスが1953年４月に創刊し、数か月で停刊になった児童向け月刊誌『こども』と、「５分間の物語」(Cerita Lima Minit) という連載記事でエドルスが執筆した児童向けの物語を紹介し、マレー・ムスリムの児童にエドルスがどのような働きかけを試みていたのかを考察する。はじめに『こども』の刊行背景および誌面の特徴を概観し、「５分間の物語」の物語の抄訳を示しながら内容を検討し、その意味を考察する。

1. 児童雑誌『こども』

『こども』が創刊された1953年は、『カラム』およびその版元であるカラム社にとって浮き沈みが激しい年になった。1953年10月、マレー人政党の統一マレー人国民組織（UMNO）のアブドゥル・ラーマン総裁の指示により、ジョホール州でUMNO党員が『カラム』と『ワルタ・マシャラカット』(*Warta Masyarakat*) を公衆の面前で燃やし、UMNO支持者に２誌の不買を呼びかける出来事があった［*Qalam* 1955.11: 41］。UMNOはイギリス植民地下のマラヤでマレー人の権利獲得の闘争を行っており、『カラム』と『ワルタ・マシャラカット』はUMNOを攻撃する記事を掲載することでUMNOの闘争を妨害しているというのがその理由だった。

『カラム』は購読者数が激減し、『ワルタ・マシャラカット』は同年に停刊を余儀なくされた。エドルスは1954年10月に女性モデルの煽情的な写真を多く掲載した芸能誌『アネカ・ワルナ』(*Aneka Warna*) を創刊し、その収入によってカラム社の財政を建て直した。

この出来事の少し前、エドルスは1953年４月１日に『こども』を創刊した[1)]。毎月１日と15日に刊行され、表表紙と裏表紙を含めて24ページで、記事はすべてジャウィ（アラビア文字表記のマレー語）で書かれた。『カラム』と同様に写真が多く掲載され、シンガポールのインドネシア・クラブで行われた「カルティニの日」のイベントに参加して着飾った少女たちの写真が表紙を飾ったこともある。

記事は、児童たちにイスラム教について教えるものや、西洋を含む世界の児童の活躍を紹介するものが多い。いずれも児童向けに平易な表現を使い、読者

1）この頃にシンガポール／マラヤでは子ども向けのマレー語雑誌がいくつか刊行されている。主なものに以下がある（括弧内は創刊年）。ペナンで刊行された『こどもの園』(*Taman Kanak-Kanak*、1949)、『こども会議』(*Majlis Kanak-Kanak*、1952)、『こどもの道しるべ』(*Pedoman Kanak-Kanak*、1954)。クアラルンプールの『こどもの楽しみ』(*Hiboran Kanak-Kanak*、1952)。シンガポールの『めばえ』(*Tunas*、1952)。

に話しかけるような書き方がされている。

児童にイスラム教について教える記事に、「トッ・シャイフ」(Tok Shaykh) が読者に語りかける「トッ・シャイフ」という連載記事がある。トッ・シャイフは「おじいさん」と「先生」が混じったような呼び名で、実在する人物の筆名なのか架空の人物なのかははっきりしない。

ただし連載第２回でトッ・シャイフが自分の生い立ちを語っている。それによれば、トッ・シャイフは「マレーの地」[2] で生まれ、地元の学校で学んだ後、16歳のときにイスラム教を学ぶために両親によってメッカに送られた。水が豊富なマレーの地と比べて、メッカは砂しかない乾燥地だったことに驚いた。神さまが豊かなマレーの地でなく痩せたメッカに啓示を下したのは不公平で、そのためにマレーの地の人びとが毎年メッカを訪れ、アラブ人に馬鹿にされたり騙されたりしながら滞在することでメッカの人たちが経済的に潤うのは納得がいかないという素直な心情を吐露している。

これを踏まえて、アラブ人が歴史的にイスラム教を受け入れていったエピソードを紹介することで、神さまがマレーの地ではなくメッカに啓示を下したことの意味を考えるというこの連載の目的が説明される。ただし、記事の内容はときにテーマから大きく離れ、トッ・シャイフが直近の断食明け大祭での自分の経験を書く回もあった。

『こども』には、児童が直面する問題を議論する「こども会議」(Majlis Kanak-Kanak) や、アラビア語講座の記事も掲載されていた。第４号からは漫画「ハン・トゥア」の連載が始まっている。アブラハム・リンカーン（エイブラハム・リンカン）の伝記の出版広告も掲載された。

読者の広がりの一端を示すものとして懸賞クイズのページを見てみたい。『こども』では、25ドルの懸賞金が掛けられたクイズが毎号出題された。『こども』の定価が一部30センであることを考えると、懸賞金はかなりの高額である。ただし、第１回の応募者が多数で、３問のクイズの全問正解者が136人いたため、懸賞金は抽選で５人に５ドルずつ分け、それ以外の131人にはカラム社の出版物が送られることになった。抽選で選ばれたのは、アローガジャ（マラッカ州）、クアラクブバル（スランゴール州）、バトゥパハ（ジョホール州）、クアラカンサー（ペラ州）、タンジュンイポー（ヌグリスンビラン州）に住む５人で、男子が４人、女子が１人だった。

2.「5分間の物語」

エドルスは『こども』で「５分間の物語」の連載記事を書いた。自分の名前のアブドゥッラーの一部を取って「ラー兄さん」を名乗り、読者に話しかけるように物語を書いた。幼い読者たちを飽きさせないように、平易な表現を使うとともに、語り手の「ラー兄さん」が文中でときどき顔を出した。

「５分間の物語」は『こども』の第１号に掲載が開始され、毎号連載されていたが、本稿では『こども』の現物を確認できた第２号（1953年４月）から第８号（1953年10月）までの記事を用いている[3]。

第２号の「愛国英雄」では、愛国英雄の精神は大人だけが持っているのではなく、10歳に満たない児童でも、男の子と女の子のどちらも、並外れた勇気と自己犠牲の心を見せたことがあると語り起こし、シンガポールのよく知られた伝承である「メカジキの来襲」を紹介する。

「メカジキの来襲」は、マラッカ王国の宮廷文学である『マレー王統記』（スジャラ・ムラユ）のエピソードと共通点を持つ民間伝承である[4]。民間伝承では人物名が示されるが、「５分間の物語」では人名や地名は伏せられている。以下は「英国英雄」の抄訳である。「ラー兄さん」が登城する部分を含め、読者に呼びかけている表現は書き言葉に改めている。

> 有名なマレー詩人のトゥン・スリ・ラナン[5]が書いた歴史書には、マレーの子たちの知恵と勇気を描いた美しい物語がある。その美しいお話というのは、ほかでもない「シンガポールがメカジキに襲われた」という話だ。ラー兄さんは、マレー学校で勉強したみんなそ

2）マレー語の「マレーの地」は固有名詞としてはマラヤを指すが、ここでは一般名詞のように使われている。『こども』の発行地であるシンガポールが含まれるだけでなく、スマトラやカリマンタン（エドルスの出身地）などインドネシアの一部が含まれる可能性も残している。

3）『こども』の第２号～第８号の全誌面およびそのローマ字翻字は［Yamamoto 2017］で公開されている。「５分間の物語」は［Shahrun Nizal 2019］でも論じられている。「５分間の物語」の第１回「スルタン・タジュル・アリフィン」は、隣国に侵略されて処刑されたスルタン・タジュル・アリフィンの息子が成長して軍人になり、父の仇討ちの機会を得たが、「憎しみに憎しみで報いるな、憎しみに愛で報いよ」という父の最期の言葉を思い出して仇討ちをやめたという物語が紹介されている［Shahrun Nizal 2019］。

4）「メカジキの来襲」は1962年に『Singapura Dilanggar Todak』（シンガポールがメカジキに襲われる）の題で映画化された。

5）16世紀から17世紀のジョホール王国の宰相。1612年に『マレー王統記』を編纂した。

の本を読んだことがあって、内容をよく知っていると信じている。

この物語は、10歳に満たないマレーの子であるアワン・シンガプーラ[6]君（ラー兄さんは彼をそう呼ぶことにする）が、その知恵によって、火の棒のように海辺を襲ったメカジキからシンガポールの人たちを救った物語だ。

メカジキの襲撃を人間の脛で防ごうとするのはさらに何千人もの命を無駄に犠牲にするだけの愚かな考えだと思い、アワン君はかわりに海岸にバナナの幹を立てるように国王に提案した。その提案によってシンガポールの人びとは滅びから救われた。しかし残念なことに、国王の臣下は狭心で嫉妬深く、この子は賢いので大人になったら王位を脅かすと国王に吹き込んだ。臣民の功績を覚えていない王は、傲慢にもアワン君の死刑を命じた。アワン君は、貪欲と嫉妬という病にかかった人の人間性はこれほど低いのかと思い、勇気と笑顔をもって死刑執行を受け入れた。

この記事のもとになっている「メカジキの来襲」はシンガポールやマラヤの子どもたちによく知られた伝承であり、「５分間の物語」には省略が多い。このエピソードは『マレー王統記』ではおおよそ次のように語られる。

あるとき、シンガポールにメカジキが押し寄せて陸に打ち上げられ、浜辺にいた人びとはその尖った口で刺されて死んだ。人びとは浜辺にいられなくなり、恐怖のため散り散りに逃げた。それを知った王はただちに象に乗り、大臣と戦士を伴って海岸に向かった。王はメカジキによって引き起こされた荒廃を見て驚愕し、王は足で壁を作るように命じたが、メカジキは降り注ぐ雨のようにおびただしい数で、さらに多くの人がメカジキの犠牲になった。

見ていた少年が、人間の足ではなくバナナの茎で壁を作ればいいと言い、それを聞いた王はバナナの茎で壁を作らせた。陸に打ち上げられたメカジキはバナナの茎に口を突き刺して外れなくなった。人びとはメカジキを殺して山のように積み上げ、食べつくせないほどたくさんのメカジキがとれた。聞いた話では、陸に打ち上げられたメカジキが王の乗った象まで飛んできて王の服が破れ、それでようやく王は少年の言うことを聞いたという。

王が王宮に戻ると、臣下が、あの賢い少年はやがて王位を脅かすので殺した方がいいと王に助言し、王は少年の処刑を命じた。少年は王の命令に応じて死刑に処され、その国は彼の血を流したという罪を背負うことになった。

シンガポールやマレーシアの民間伝承ではおおよそ次のように語られる。民間伝承には内容や表現が異なるものが複数存在し、ここで紹介するのはそのうちの１つである。

シンガポールが漁村ばかりでトマセックと呼ばれていた頃、人びとはスルタンの統治のもとで海辺で穏やかに暮らしていた。ある日、数百匹のメカジキが海から陸地に跳びはねてきて、その尖った口先で人びとを刺して大けがを負わせた。助けを求められたスルタンは、王宮の助言者に従い、兵士たちを海岸に立たせてメカジキの攻撃を防ごうとした。しかしメカジキの鋭い口の前には歯が立たず、兵士は次々と負傷していった。

その様子を見ていた１人の少年が兵士の代わりにバナナの幹を並べればいいと言い、それを聞いたスルタンは住民に命じてバナナの幹を海岸に並べて塀を作らせた。再びメカジキが襲ってきたが、口ばしがバナナの幹に突き刺さり、村人に犠牲は出なかった。満足したスルタンが少年に名前を尋ねると、名前はハン・ナディムで、歳は12だと答えた。

王宮の助言者は、ハン・ナディムが成長したらスルタンの地位を脅かすだろうと言い、スルタンは助言に従ってハン・ナディムの処刑を命じた。ハン・ナディムは丘で殺された。その丘はハン・ナディムの血で赤く染まり、タナメラ（赤い土地）と呼ばれるようになった。ハン・ナディムがバナナの幹で柵を作って人びとを守った村は、現在のタンジュン・パガー（柵の岬）である。

「５分間の物語」ではアワン・シンガプーラが笑顔と勇気をもって自分の死刑を受け入れたところで終わるのに対し、民間伝承では処刑が行われ、現在のシンガポールの地名の由来が語られている。

『マレー王統記』ではこの少年に名前が与えられていないが、民間伝承ではハン・ナディムという名前が与えられている[7]。「メカジキの来襲」はシンガポー

6）「アワン・シンガプーラ」は「シンガポール坊ちゃん」の意味。日本語訳には「君」を加えた。

7）『マレー王統記』には、「メカジキの来襲」と別のエピソードに、王国の軍を率いるハン・ナディムという人物が登場する。ハン・ナディムはマレー人の民族的英雄ハン・トゥアの養子で、実の父は、ハン・トゥアの幼馴染にして最大のライバルであり、ハン・トゥアとの戦いで敗れて命を落としたハン・ジュバである。メカジキのエピソードに登場する少年は幼いときに死んでおり、王国の軍を率いるハン・ナディムとは別人である。

ル／マラヤで最もよく知られた伝承の１つであり、したがってこの少年の名前がハン・ナディムであることも読者には明らかだったはずである。それにもかかわらず匿名にして「シンガポールの坊ちゃん」という一般名詞で呼んだことは、シンガポールの幼い読者たちに、勇敢で賢いこの少年を他人の物語として読むのではなく、自分もそうなれる存在として読んでほしいという思いが感じられる。

このことは、第２号の「５分間の物語」で「メカジキの来襲」に続いて記されたもう１つのエピソードと関わる。アメリカのデニス・アグレラという少年の話が紹介されている。

> 両親の不在中に家が火事になったとき、４歳のデニス少年は自分１人で逃げるのではなく、１歳の弟を火の中から救い出した。デニスの勇敢な行動を称えるため、市内の広場で２万人の市民が見守る中、デニス少年は政府から金のメダルを授けられた。

詳細は不明だが、この記事が掲載された頃にアメリカで実際に起こったできごとだろうと思われる。小さな子が自分の身の危険を顧みずに他の子の命を救ったという話はハン・トゥア勲章を思い出させる。

マラヤ連邦（後にマレーシア）では、国王が勇敢な子にハン・トゥア勲章を授ける制度が設けられた。溺れている子を助けた少年モハマド・ノル・オスマンが1960年10月に最初のハン・トゥア勲章の受章者になり、翌年２月にルスナ・アクサが女児で初めてハン・トゥア勲章を受章した。「５分間の物語」で紹介された２つのエピソードは、いずれも後のハン・トゥア勲章と同じく、ものごとの本質を捉える賢さと実際に行動する勇気を兼ね備えた子に育つようにという期待を児童に向けていたことがうかがえる。

ただし、ハン・トゥア勲章は少年少女が自分の命を危険に晒す行動を煽るとして1978年に廃止されている。これと同様に、「５分間の物語」も、「メカジキの来襲」では少年が処刑を受け入れ、アメリカの火事の話では命は助かったとはいえ極めて危険な行動をとっており、この２つの話を美談とするならば、幼い読者に自分の命を投げ出すことを勧めているというメッセージを伝えることになりかねない。この問題は第３号でも引き続き見られる。

第３号ではフランス人によって書かれたエジプト人（アラブ人）の少年の話が紹介される。内容を抄訳で紹介する。

> ナポレオン率いるフランス軍がエジプトに侵攻したとき、エジプトのアラブ人はフランス軍に勇敢に抵抗した。ある晩、アラブ人少年がフランス軍の野営地に忍び込んで銃を盗み、村に運んで村人たちに渡した。少年はフランス軍に捕らえられ、背中を刀で斬りつけられて血を流した状態でドセー将軍のもとに連行された。なぜ武器を盗んだのかと尋ねられた少年は、恐れる様子を見せず、自分の首を刎ねるようにと将軍に言った。将軍はその勇気に驚き、30回の鞭打ちの罰を与えた。12歳に満たないその少年は、少しも声を上げることなく30回の鞭を受けることで勇敢な抵抗を見せた。

この話に出典は記されていないが、「ベリアール将軍がこの少年の話を彼の本に記している」とあることから、ヴィヴァン・ドノン『ボナパルト将軍麾下の上下エジプト紀行』（以下、『エジプト紀行』）のエピソードの１つであることがわかる。

ドノンはフランス人の美術研究者であり画家でもある。1798年から1801年までフランス軍がエジプトを占領したとき、ナポレオンを総司令官として行われたエジプト遠征に記録係として参加し、帰国後に『エジプト紀行』を刊行した。その本がフランス読書界の話題になったこともあり、刊行の８か月後にルーブル美術館の初代館長に就任した。『エジプト紀行』には、時の絶対権力者であったナポレオンの歓心を買うため、実際に現場にいなかったドノンが伝聞で書いていることなどいくつかの虚構が見られる［杉本 2005: 7］。

準主役級のドセー将軍のエピソードとして、1798年12月17日に上エジプトのモンカチン付近で起きた窃盗事件を記し、ドセー将軍とアラブ人少年の話を書いている。それによれば、12歳のアラブ人少年がフランス兵の鉄砲を盗もうとして捕まり、ドセー将軍のもとに連行された。天使のようにかわいらしい少年で、肩には軍刀で斬られたと思われる大きな傷があった。フランス兵は、誰に命じられて何のために鉄砲を盗もうとしたのか尋問し、白状すれば危害は加えないが、黙っていると相応の罰を与えると言った。少年は、神のみが知るとだけ答え、頭巾を脱いで、この首を斬り落とせと叫んだ。有害な宗教のために間違った原理がドグマになり、信者は英雄的な行為にも出られるし悪辣な行為にも出られると思った将

軍は、哀れんで少年を放免した［杉本 2005: 8］。

このエピソードは武器を盗もうとしたアラブ人少年を無罪放免にするドセー将軍の寛大さを示したものだが、無罪放免にしたというのはドノンの脚色だった。ドセーに次ぐ地位にあったベリアールの日記によれば、犯人が若年であることと進んで罪に服そうとしている態度を考慮したドセーは鞭打ちで済ませることにし、少年は自らその場に座って背中に30回の鞭を受けた。ドセーは少年への罰を減じたという意味では寛容さを持ち合わせていたが、それでも12歳の少年に30回の鞭を打たせていた。ドノンは、イスラム教によってムスリムが陥った宿命主義や狂信と対比させることでドセーに代表されるフランス人の寛容さを読者に提示するため、ドセーが少年を無罪放免にしたように書き替えた［杉本 2005: 8］。

「５分間の物語」はベリアールの日記を参照しており、少年は30回の鞭を受けている。アラブ人の宿命主義や狂信さを強調することでフランス人の寛容さを示そうとしたエピソードが、12歳のアラブ人少年の勇敢さを語るために使われている。しかも、鞭を打たれただけでなく、捕らえられたときに村人たちに累が及ぶのを防ぐため、少年は口を割らずに自分の首を刎ねるようにとだけ言っている。ここでも、少年の勇気が自らの命を投げ出すこととして語られている。

賢さと勇敢さをもって他人を助ける人に育ってほしいという願いが表現されるとき、自らの命を犠牲にすることを美化する話ばかり書かれてしまうのはなぜか。これについてはっきりした答えはないが、その頃までに書かれていた児童文学には当時のマレー・イスラム世界の児童にふさわしいものが見つけられなかったという事情があったのではないだろうか。

当時のシンガポール／マラヤで読まれていた児童文学の多くは欧米人によって書かれたものだった。エドルスが『カラム』を創刊した理由の1つは、第二次世界大戦による荒廃のためにシンガポール／マラヤの若いムスリムたちがイスラム教の信仰から離れ、親や教師の言うことを聞かない若者が増えていることへの懸念だった。家庭や地域社会の崩壊を防ぐためにイスラム教の教えに立ち返る必要があり、そのため大人の読者向けには『カラム』を創刊し、児童向けに『こども』を創刊した。エドルスにとって、キリスト教的な価値観が根底にある欧米の児童文学は、そのままの形ではシンガポール／マラヤの児童に提供しにくいものだったと考えられる。

欧米の児童文学以外に児童が登場する読み物を探すとすれば、大人を主人公とする物語で児童が登場するエピソードを抜き出すことになり、そこでは児童は大人の残酷さや寛大さを示す道具のように扱われることになる。「５分間の物語」でエドルスが試みていたのは、マレー・イスラム世界にふさわしい児童文学の模索だったのではないかと思われる。

そのような試みの１つとして、第４号から連載が始まった「空飛ぶ馬」を紹介する。内容から、ギリシア神話に登場するコリントスの王で、神馬ペーガソスに乗ってキマイラを退治した英雄ベレロポーンの物語が下敷きになっていると考えられる。ベレロポーンは王からキマイラの退治を命じられる。キマイラは、ライオン、ヤギ、ヘビの身体を持ち、口から火を吐く怪物である。ベレロポーンはペイレーネーの泉（息子を失って嘆き悲しんだペイレーネーの涙でできた泉）で水を飲んでいるペーガソスを捕らえ、ペーガソスにまたがって高く飛翔してキマイラを退治する。

「５分間の物語」では第４回から「空飛ぶ馬」が毎号掲載された。以下では第４号から第８号まで掲載された「空飛ぶ馬」を抄訳で紹介する。

３.「空飛ぶ馬」（抄訳）

Ⅰ（第４号）

何千年も前のギリシアの話。１人の女の人が、愛する息子と一緒に丘に散歩に行った。しかしシカを捕まえようとして猟師が放った矢がその男の子に当たってしまい、男の子はその場で死んでしまった。息子を失った女の人は幾日も嘆き悲しみ、その涙で小川ができるほどだった。土地の人たちはそれを「涙の小川」と呼んだ。

若い英雄

ある日、若い男がその小川を通りかかった。近くの畑では２人の年老いた農夫が畑仕事をしていた。小川では賢くて勇敢な少年を連れた女性がひょうたんで川の水をすくっていた。若い男はその女性にひょうたんの水を飲ませてくれるよう頼んだ。水を飲んだ若い男は、これほどおいしい水は生まれて初めて飲んだと言い、その小川の名前を尋ねた。女性は、さっきラー兄さんが書いた話をして「涙の小川」と答えた。

若い男は、これまで昼も夜もなく歩き続けてようや

くこの場所にたどり着いたが、この場所の水がこれほどまでにおいしいとは思いもしなかったと独り言を言った。

空飛ぶ馬

若い男は宝石と金で装飾されて光輝く頭絡を手に持っていた。それを見た農夫が、逃げた馬を探しに来たのかと尋ねた。若い男は、馬に逃げられたのではなく、空飛ぶ馬を探しに来たと答えた。空飛ぶ馬がこの近くの山頂を飛びまわっているという話を聞いたためだった。農夫は、この若い男は現実に存在しないものを探し求めて年月を重ねていくと思ったが、それを放っておくことにした。

Ⅱ（第５号）

読者のみんなは空飛ぶ馬がどんな姿をしているのか知りたいだろう。ラー兄さんが教えてあげよう。

昔々の話によると、空飛ぶ馬は２つの翼を持った白い馬で、鳥のように羽ばたいて飛ぶことができた。空飛ぶ馬は、長い間、人間から離れて穏やかに暮らしていた。夜は山の頂で寝て、昼は空を飛びまわった。空を飛ぶときは２つの翼が陽の光を受けて輝いた。

夏になると空飛ぶ馬は地上に降りてきて、稲妻のように速く走って山や谷を越えて、以前話した「涙の小川」のところまで来た。小川の水をおいしそうに飲み、そばの草原で嬉しそうに転げまわった。

以前はそうだったけれど、空飛ぶ馬はもう長い間、小川に来ていない。その土地を訪れた人がごくまれに見かけることがある程度だった。

前に話した若い男は、ひょうたんで水を汲んでいた女性に空飛ぶ馬を見たことがあるかを尋ねた。女性は、白いワシのように馬が空を飛んでいるのを見たことがあり、これが話に聞く空飛ぶ馬かと思ったけれど、それはこれまでの人生で一度きりだと答えた。しかし女性と一緒にいた少年は、空飛ぶ馬を何度も見たことがあり、昨日も見たと言った。

若い男は大喜びして少年に詳しく話を聞いた。少年は紙で折った舟を川に浮かべて遊ぶのが好きで、その小川によく遊びに来ていて、舟を浮かべながら水面を見ているときに空飛ぶ馬の影が映っているのを見たと話した。少年は、空飛ぶ馬を見るたびに自分を乗せて月まで連れて行ってほしいと思ったけれど、いつも空高く飛んでいたので希望はかなわなかったと言った。若い男は少年の記憶力のよさに感謝してその場を去った。

若い男は次の日から毎日その小川を訪れ、朝から夕まで、空飛ぶ馬を探して空を見上げたり影を探して川面を眺めたりして過ごした。何も得られずに何日も過ぎていったけれど、若い男はきっと空飛ぶ馬を見つけることができると信じて忍耐強く待つことにした。

村人たちは、空飛ぶ馬などという存在しないものがいると騙されて時間を無駄にしていると嗤った。空飛ぶ馬の話をした少年は、毎日小川に遊びに来て、村人たちに嗤われる若い男の話し相手になっているうちに若い男と友だちになった。

Ⅲ（第６号）

読者のみんなは、若い男がどうして「涙の小川」に来たのか、どうして忍耐強く空飛ぶ馬を待っているのか、空飛ぶ馬を見つけたらどうするのかが知りたいだろう。みんなの頭にはそんな疑問が浮かんでいるのではないかな。ラー兄さんの想像は当たったようだね。ラー兄さんがその話をしてあげよう。

この物語の主人公の若い男はアジア大陸のある国から来た。武術に長けていて、これまでどんな試合にも負けたことがない。

あるとき、彼の国に大きなドラゴンが侵入してきた。人びとは怖がって逃げまわったけれど、ドラゴンは恐ろしい力を持っていて、口から吐く火と毒で多くの人が死んでしまった。

ドラゴンは、私たちが絵を見たり話に聞いたりしたことがあるドラゴンとは違い、尻尾はヘビで、頭は３つあって、それぞれライオン、ヤギ、ヘビの頭をしていた。

国王は武術に長けた若い男を呼んだ。その若い男は人びとからジョハン・プルカサと呼ばれていた。国王は、国を脅かしているドラゴンを退治できるのはジョハン・プルカサしかいないと言ってドラゴン退治を命じ、ジョハン・プルカサはドラゴン退治を引き受けた。

ジョハン・プルカサは自分の命と引き換えにしてでもドラゴンを退治すると決意したが、どうすればドラゴンを退治できるのか思案した。ドラゴンと戦うには馬に乗る必要があるし、その馬はドラゴンと戦う勇気を持っていなければならない。ジョハン・プルカサは長老たちから話に聞いていた空飛ぶ馬のことを思い出した。そして父から受け継いだ頭絡のことを思い出した。宝石と金が散りばめられた不思議な頭絡で、この大変な任務を成し遂げるにはこの不思議な頭絡が要になると思った。

Ⅳ（第７号）

ジョハン・プルカサは空飛ぶ馬をずっと待ち続けていたけれど、これ以上待てないので国に戻って空飛ぶ馬なしでドラゴンと戦うしかないと考え始めていた。しかし空飛ぶ馬がいなければドラゴンに勝てるかどうかはわからない。

苦悩を浮かべた顔で思案していると、友達になった少年が川面に映った空飛ぶ馬の影を見つけて指さした。ジョハン・プルカサが空を見ると、一羽の鳥が空を飛んでいるような姿が見えた。翼は陽の光を浴びて輝いていた。ジョハン・プルカサは、故郷から遠く離れて長い間探し続けてきた空飛ぶ馬を見つけたと喜んだ。

空飛ぶ馬は地上に降りて、小川の水をおいしそうに飲み、草を食べ、草原を走りまわった。物陰に隠れて様子を見ていたジョハン・プルカサは、これほど美しいものを見たことがないと言った。これを逃したら二度と機会は訪れないと確信したジョハン・プルカサは、物陰から躍り出るとすばやく空飛ぶ馬にまたがり、力強くたてがみを掴んだ。

空飛ぶ馬は驚き、怒って、あちこち跳びはねて背中に乗った男を振り落とそうとした。突然空に飛びあがったかと思うと急降下し、このままだとジョハン・プルカサは地面にぶつかって死んでしまう。

しかし勇敢なジョハン・プルカサが父親から受け継いだ不思議な頭絡を取り出して空飛ぶ馬にはめると、大暴れしていた空飛ぶ馬は急におとなしくなり、ジョハン・プルカサの命令に従った。ジョハン・プルカサは空飛ぶ馬の背をさすって親愛の情を示し、空飛ぶ馬もますますジョハン・プルカサに従順になった。

Ⅴ（第８号）

空飛ぶ馬は荒々しい野生の馬からジョハン・プルカサに従順な美しい馬に変わった。

ジョハン・プルカサを乗せた空飛ぶ馬が山頂に着くと、ジョハン・プルカサは頭絡を掴んだまま空飛ぶ馬から降りた。ジョハン・プルカサは空飛ぶ馬の従順な目を見て、愛おしそうに背をさすりながら、頭絡を外し、これで自由の身になったから好きなところに行っていい、戻ってこなくてもいいし、死ぬまでずっと一緒に暮らしてもいいと言った。

空飛ぶ馬はすぐさま飛び去り、ジョハン・プルカサに見えないところまで行ってしまった。空飛ぶ馬がもう戻ってこないと確信したジョハン・プルカサは、空飛ぶ馬を手放してしまったことをとても後悔した。悲しみに打ちひしがれていると、空飛ぶ馬が戻ってきて、ジョハン・プルカサに優しく身を寄せた。ジョハン・プルカサは空飛ぶ馬がずっと自分に従順だったし、これからもそうであることを知った。その晩、ジョハン・プルカサと空飛ぶ馬は同じ場所で寝た。次の日もその次の日もそうした。

＊

時は穏やかに過ぎていき、ジョハン・プルカサと空飛ぶ馬の関係は日ごとに深まり、ジョハン・プルカサはいつまでもこの平和な日々が続くことを願っていた。

しかしジョハン・プルカサは自分の責任を果たさなければならなかった。国王に約束した通り、ドラゴンを退治して、愛する故郷とそこに住む人びとを救うという責任を負っていた。

その晩、ジョハン・プルカサはその大役を果たした夢を見た。夜が明けると、ジョハン・プルカサは元気いっぱいで目覚め、寝ていた空飛ぶ馬を起こした。ジョハン・プルカサは朝ご飯を食べ、空飛ぶ馬は小川の水を飲んで草原の草を食べた。

ジョハン・プルカサは武器を装備して空飛ぶ馬にまたがり、東に向かった。空飛ぶ馬は風と競いながら空を飛び、ジョハン・プルカサの国からあまり離れていないところにあるドラゴンの巣に着いた。ジョハン・プルカサの指示を受けて、空飛ぶ馬はドラゴンに気づかれないように濃い霧がかかった山頂に降りていった。

４．むすび

筆者が参照できた『こども』は1953年８月16日刊行の第８号までであり、『こども』はその後も少なくとも1953年12月まで刊行が続いていることから、「空飛ぶ馬」の連載は第９号以降も続いたと思われる。そのため、ジョハン・プルカサがドラゴンをどのように退治し、その後でジョハン・プルカサと空飛ぶ馬がどうなったのか、そして小川のそばに暮らしている少年がどうなったのかは本稿執筆時には確認できていない。

ただし、第８号まで読む限りでは、物語の主人公は若い男であるものの、少年も重要な役割を果たしている。若い男が空飛ぶ馬の存在を疑い始めたところで空飛ぶ馬を昨日も見たと言い、空飛ぶ馬なんて存在しないと村人たちに嗤われる若い男に寄り添い、若い男が諦めて国に帰ろうかと思ったところで空飛ぶ馬を見つけている。若い男が道を見失って諦めそ

うになるたびに少年が若い男を支えている。

物語上は若い男が主役で、武術に長けた若い男が空飛ぶ馬とともにドラゴンを退治するという展開になると思われ、読者の児童たちは若い男に自己投影して物語を愉しむことだろうが、その物語を読みながら、主役の若い男の活躍をいつも少年が支えているという記述が織り込まれており、ここにエドルスの「空飛ぶ馬」を書いた意図がうかがえるように思われる。

本稿ではエドルスが創刊した児童雑誌『こども』、特にその中でエドルスが執筆した「５分間の物語」を取り上げ、エドルスが児童向けの読み物にどのような思いを込めているかを検討した。「５分間の物語」にはマレー・ムスリムの児童にふさわしい児童文学をつくるというエドルスの思いが反映されていたものと考えられる。

参考文献

Hashim Ismail & Mohd Hanafi Ibrahim. (eds.). 2019. *Sejarah dan Tokoh: Ahmad Lutfi Pembangkit Semangat Zaman*. Dewan Bahasa dan Pustaka.

Shahrun Nizal Mohd Nor. 2019. “Sumbangan Ahmad Lutfi terhadap Perkembangan Kesusasteraan Kanak-Kanak: Suatu Kajian Awal”. ［Hashim & Mohd Hanafi 2019:100-115］.

Talib Samat. 2002. *Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah*. Dewan Bahasa dan Pustaka.

Yamamoto Hiroyuki. (ed.) 2017. *Kanak-Kanak*. (reprint with transcript in latin alphabet, April-October 1953.). CIRAS Discussion Paper No.74. Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.

杉本淑彦 2005「ヴィヴァン・ドノン『ボナパルト将軍麾下の上下エジプト紀行』の200年」『パブリック・ヒストリー』、２号、pp. 1-19。

山本博之 2021「戦後シンガポールの活気と混乱：アフマド・ルトフィ名義の小説群（1948～1950年）をもとに」光成歩・山本博之編著『カラムの時代Ⅻ――マレー・イスラム世界の社会変容と女性』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 44-50。